

恩師藤永太一郎先生を悼む

1919年1月22日神戸市に生まれる。1939年大阪高等学校卒業後、京都帝国大学理学部化学科に入学。途中兵役に服しながら1941年京大卒、同年秋助手就任。講師、助教授を経て、1960年12月教授就任。在任中、学内では地球物理学研究施設教授、天津臨湖実験所教授、瀬戸臨海実験所長、機器分析センター長を併任、学外ではIUPAC正委員、日本学術会議会員、本会会長、京都府環境審議会会長などを務められた。京大停年退官後は神戸学院大学教授、奈良教育大学学長を歴任された。タランタ・ゴールドメダル、日本学士院賞、ソ連科学アカデミー・クルナコフメダル、英国ロバートボイル賞、京都府文化賞、勲二等旭日重光章などを受けられた。

去る6月4日、本会名誉会員藤永太一郎先生には95年の生涯を静かに閉じられました。近親者の方々のみでの葬儀告別式ではありましたが、近くに居た研究室ゆかりの20余名が弔いに加わり、その折、ご令息 藤永薫氏（金沢工業大学教授）より、藤永太一郎先生の辞世のご挨拶を言付かりました。“私（藤永）は、皆様方と永くまた広く交流し、大勢の方々のお世話になりました。お陰で大変幸せな人生を送ることが出来ました”。以上ここに謹んでお伝え申し上げます。

本誌の創刊（1975年1月）以来、藤永先生は熱心な読者のお一人でした。実際、配本とほぼ同時に頁の隅々にまで目を通されていて“ねえ、ほりくん、面白い記事が載ってましたよ、読みましたか”との問い掛けが度々ありました。しかし、私にはその面白い記事が直ぐには見つかりませず、また、お師匠さまに問い合わせることも躊躇われ、結局月号々々全編を詳しく読みました。お陰でいまでは愛読者の一人になっています。その後長い時間が経って漸く、お師匠様なら面白いとおっしゃる筈の箇所を記事の中から自分で探せるようになりました。

専門学術に関する多数の著作はもとより、大学の真の姿、研究活動の意義と使命、科学における分析化学の位置付け、教育者の姿勢と覚悟、人類の来し方行く末を軸にした文化論、人間と地球の関係を原点にした環境論、文教政策立案の出発点と方向性、実益主義と主知主義を対比した教育論、開発と保全の均衡を基にした都市論などなど、講義録、講演録、メディア記事は広範に及んでいます。しかもその一つひとつにおいて、事の重大さからの説き起こしがあって、問題解決への糸口と方法が誘導され、文末には将来に向けての解決法の示唆が込められています。研究、教育、芸術において、そして日々の営為においても、人は様々な困難な問題に出会いますが、それらの原理原点を探り、方法を考案し、仲間と語って一層磨きをかけるといった、思索の大きな流れを愉しんでおられました。そして後年、“学而時習之 亦不説乎 有朋自遠方来 亦不楽乎 人不知而不愠 亦不君子乎”から「説 楽 君子」の四文字を抜き出し、これを“(真の) 学問、交友、処世”の基本として座右に置かれていました。

藤永先生は、ご自身に対して一段と厳しいお方でし



た。折々に、“はやりの領域で運よく大発見にめぐり合う学者もあるが、本当に優れた学者とは、その人の方法によらなければその領域を研究することができないような方法論を開拓した人のことである（桑原武夫）。”“京大で講座を担当するからには分析化学の根幹を究めるのがよい。境界領域などに逃げたはいけない（石橋雅義）。”“君は若い、20年以上教授をつとめる事になるが随分立派な仕事ができるよ。それには部下の速い出世の世話など考えず一緒に苦勞をすることだ（平沢興 元京大総長）。”といった独り言を比較的大きな声で仰っていました。小さい声であればよかったのですが、周りの我々にまで漏れ聞こえてきて、しばしば肝を冷やしました。

藤永先生を初めてお訪ねして卒論のテーマを頂きました。五階建化学教室の二階部分に教授室があって、隣接する後二条天皇陵の樹木が大窓を通して室内に緑陰を作っていました。艶ありワインレッドに塗られた重量感のある木製本棚を背にして、大机に向かって静かにペンを走らせておられるお姿は大学の先生そのものでした。爾來今日まで46年間、二通りの呼びかけをお受けしながらご指導を仰ぎました。“ねえ、ほりくん”との呼びかけにはその後には和やかな問答が続き、人文科学・社会科学・自然科学が未だ分化する前の時代、エーゲ海を見下ろしながら「火水土風」を自然の四元素として見抜いたギリシャの哲人との対話を思わせるような錯覚に誘われました。他方、呼びかけが“ほりくん、ねえ”と来たときは、その後には大叱声がつらくなりました。

今回は、この46年のご縁のもと、不肖中の不肖弟子の一人が藤永先生を悼むことになりました。“ほりくん、ねえ。文章は書いたら読む人が居るんだよ。もっと言えば、読まされる人もいるんだ”とのお叱りが聞こえそうです。しかし、今回は反問する準備があるのです。“そんなにご不満なら、こちらに戻って来られて直接おっしゃってもいいんですよ”と。長年のご指導、忘れることはございません。有り難うございました。

〔京都大学白眉センター 堀 智孝〕